

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第九回

第九章 銅山にて

1

新居浜惣開にい はまのいひのひらから別子銅山べつしに行くには、貞剛ていこうが支配人として赴任した明治二十七年（一八九四年）においても大変な苦勞くろうを強しいられた。

赴任直後に、銅山に住む少年、小吉こきちの案内で登ってみたが、延々と続く細い仲持道なかもちに疲れ切り、体の節々が痛くてどうしようもなくなつた。

海拔一三〇〇メートルもある銅山越えと呼ばれる峠の頂上に立ち、

遙か眼下に銅山を眺めた時、はらはらと涙が溢れてきた。

「どうしたの？ おじさん」

小吉が不思議そうな顔をして尋ねる。

「ははは」貞剛は、きまり悪そうに笑い、涙を拭^{ぬぐ}う。「見られてしまったか？ この険しい山道を一〇貫（約四〇キロ）以上もの鉱石や生活物資を背負って歩いて運んだと思うと……その苦勞に手を合わせたいくらいありがたいと思ったのだよ」

「おばあちゃんは仲持をしていたんだけど、ずっと昔は別の峠を通っていたんだって。だから山の茶屋で二泊もしたらしいよ。みんなでおしゃべりして楽しかったんだってさ」

小吉は生き生きと話す。

「そうなのかい？ 二泊もね」

貞剛は逆に苦勞を想像して胸が痛む。

「この銅山越えの道ができて一泊で済むようになって、それから牛車道ができて、もっと便利になって、鉱山鉄道ができたら、とうとう仕事が無くなったってさ」

小吉は、陽気に笑う。

「仕事が無くなったのか。悪かったな」

「そんなことはないよ。おばあちゃんも年を取ったから、ちょうど良かった。辞め時だったって。時々、お山に雪が降るとね、おばあ

ちゃんはお山に手を合わせて、泣くんだ」

「どうしてだね」

「冬のお山は雪が積もってすごく寒い。草鞋わらじが雪で滑って大変だった。仲持の友達が、雪で足を滑らせて、崖下に転落して亡くなったんだってさ」小吉は峠の一隅を指さした。小吉の指さす方向には、周囲を石垣に囲まれ、石段を上った台座に鎮座する地蔵がある。

小吉は手を合わせた。「あのお地蔵さんは、亡くなった仲持さんをお祀りまつしてあるんだ。八月の四日には、縁日すももがあつてね。相撲大会があるんだよ」

「そうなのか……。相撲か。小吉は強いのか」

「まあまあだね。横綱じゃないけど」

小吉が鼻の下をひとさし指こすで擦る。得意げな顔だ。

「拝んで行こうか」

貞剛は地蔵に歩み寄る。

小吉は一緒に行かずに、小走りに何処どこかへ駆けて行った。

石段を上る。穏やかな笑みを湛たたえた地蔵だ。貞剛は、頭こうべを垂れた。

「おじさん、これ」

小吉が声をかけた。振り向くと両手が赤い実でいっぱいだ。

「それは？」

「銅山いちごだよ」

「いちご？」貞剛は、摘まんで口に運ぶ。甘酸っぱくて美味しい。疲れた体が一気に元気になる。

「美味しいだろう？ これは本当はアカモノっていうんだ。これでお酒を造ったりするんだよ」

小吉も口に運ぶ。時々、酸味の強いものが混じっていて、顔をくしゃくしゃにする。

さらに牛車道を歩いて先へ進む。谷にへばりつくように建つ家々や建物が眼下に見えてくる。煙が幾筋も立ち昇っている。鉱石を焼く焼窯からの煙だ。硫黄いおうの匂いが鼻をつく。

「ようやくここまで来たな。蘭塔場らんとうばに寄ってから目出度町めったまちへ行こうか」

「目出度町に寄るの？」

小吉が嬉しそうな顔をする。

目出度町は商店や食堂などが並ぶ、銅山唯一の賑やかな場所だ。

「お礼に何か買ってやる」

貞剛がにこやかに言う。

「ホント？ ホント？」小吉は破顔する。そして思索し、「えびす屋の饅頭まんじゅうがいい」と声を弾はずませた。

「小吉はどこに住んでいる？」

「うちは、あそこ」

目出度町の方向をさす。商店が並ぶ見花谷、両見谷と言われる谷がある。そこには坑夫住宅が密集していた。稼ぎ人と言われる流れの坑夫たちの住まいだ。小吉の家はその内の一軒なのだろう。「小吉だけじゃなくてお父さんにもお土産を買ってやろう。お礼にな」

「やった！ だったらお酒がいい。伊予屋に売ってあるから」
伊予屋は目出度町で最大の百貨店だ。

「その前に勘場に寄るかな。挨拶をしないといけないからな」
勘場とは勘定場のことで、銅山経営を担う統括事務所だ。

住友家の使用人が勤める出店、病院である医館、大山積神社の祭礼で使う神輿を納めるミコシ蔵、銅山の糧食や給金支払いを担当する売庭、客の接待や支配人など幹部の住居にも使われている座敷、山を監視する役割の坑夫頭である廻切夫が待機する山廻部屋などで構成されていた。

牛車道を辿りながら石組みの蘭塔場に近づく。目出度町の賑わいを見下ろすかのように周辺より小高くなっている。

「蘭塔場って、昔の大火事で亡くなった人を祀ってあるんでしょ？」
「銅山を火事から守ろうとして百三十二名もの人が亡くなったんだよ」

元禄七年（一六九四年）の四月。別子銅山開坑から三年経って

た。春になり、冬ごもりから抜け出し、ようやく仕事を再開できる。銅山や目出度町も活気づいていた。

当時の別子支配人・杉本助七は手代や勘場役人らと銅山を見回り、坑夫たちに声をかけていた。

風が強い。こうした日は火災に気をつけねばならない。助七は焼窯を見回っていた。この窯の底に薪たきぎを敷き、碎女かなめが砕いた鉱石を並べる。それを幾段も積み重ね、その上を藁わらや筵むしろで覆い、水をかけながら燃やす。三十日から五十日ほどその作業を続けると焼鉱やきになる。この焼鉱かに吹床ふきどで風と火を送り、銅分を取り出す。

いつもより硫黄の匂いがきつい。冷やし水が十分ではないのではないかと懸念した瞬間、焼窯から爆発音が響き、炎が上がった。

「火事だ！」

助七は、大声で叫び、坑夫たちを指揮して、水をかけた。しかし折からの強風に煽あおられて、炎はたちまち広がり、山肌から谷に赤い舌を伸ばす。

午前十時頃から午後二時半頃までの四時間で、番所四軒、勘場一軒、銅蔵一軒、米蔵一軒、雑物入蔵一軒、吹所ふきしょの前身である床屋二十三軒、銅改所一軒、焼窯四百か所、炭蔵一軒、坑夫小屋二百二十五軒、碎女小屋三軒など、銅山施設のほとんどを焼き尽くしたのである。

そして何よりも悲劇だったのは支配人・杉本助七をはじめ、百三十二人も尊い命が失われたことだった。

木立に囲まれた蘭塔場の石段を上がる。蘭塔とは、禅宗における墓所のことだ。

貞剛は、ひざまず 跪き、石碑に向かって頭を垂れる。無事に務めが果たせるようにと、犠牲になった人たちに祈る。隣にいる小吉も同じように祈っている。

銅山では、これまでも水害、火事などで多くの人が亡くなっている。こうした犠牲者を少なくすることは支配人としての重要な仕事だ。坑夫たちの働きで、住友は成り立っている。そのことを片時も忘れないようにしなければならぬと強く誓った。

蘭塔場の高台に立ち、鉱山街の様子を眺める。

あちらこちらから焼窯の煙が立ち昇っている。風向き次第では、貞剛のところはまだ流れてきて、硫黄臭に鼻と口を押さえねばならない。

勘場が見える。目出度町の賑わいもその下に広がっている。ここには住友病院、公衆浴場、百貨店、料亭一心楼、村役場、そして山の安全を守る大山積神社などが、狭い谷間にひしめき合っている。常時、この銅山には数千人が居住し、日中には一万五千人もの人が行き来している。

「この賑わいは大したものだが、緑がないなあ」

貞剛は嘆息した。

眼下に広がるのは、赤茶けた土がむき出しになった山肌である。

緑の木々がない。

地獄もかくやと思われるような荒涼とした景色だ。

別子銅山が長きにわたって山々の木々を、鉱石を焼く炭に使用し、建物を建設する用材とするため乱伐を繰り返してきたからだ。

今や炭の使用量は年間九〇〇〇トンを超えるまでになっている。

——これは山ではない。ただの土くれだ。死したる土くれだ。

貞剛は、考える。日本人は、自然を愛する。桜花を愛^めでて、心を浮き立たせる。一方、松や杉などの緑を湛^たえた木を見、それらの木に囲まれることで、勇気を奮い立たせる。論語にも「年寒くして松^{しょう}の凋^{はく}むに後^おるるを知る」と言うではないか。どんなに厳^ししい冬であろうと、雪の重みに堪える松の姿は、我々をどれだけ奮い立たせてくれることか。

山々の広葉樹は、若葉の季節には緑となり、秋には赤や黄など、人の技を超えた色彩になる。

自然に造詣^{ぞうけい}の深い地理学者、志賀重昂^{しがしげたか}は、『日本風景論』でこのような山の景色を称^たえて、「染め具をもつてこのごとく調合せんとするも、庸凡の頭脳をもつてとうていなしうべからず、大地の彩色

は山を得て初めて絢煥けんかんす」と書いた。

貞剛は、隣に立つ小吉を見つめた。この少年に豊かな山の木々を見せてやりたい。

「なあ、小吉」

「なに、おじさん」

「このまま別子の山を荒れ放題にしておくことは天地の大道に背くことだ。だから私はなんとしても別子の山々を元の青々とした姿にして、大自然にお返ししたいと思うのだが、どうかな」

小吉に問いかけると、小吉は、しっかりとした目つきで貞剛を見つめ、「おじさん、そうしたら狐やリスなんかも戻ってくるかな」と聞いた。

「ああ、山々が緑になれば、みんな戻ってくる」

「おじさん、僕にも手伝わせてよ。緑にするのを」

「ああ、ぜひ手伝ってくれ」

貞剛は、小吉の頭を撫でた。

2

「伊庭様いば、どうなされました」

勘場に行くと、前支配人の久保盛明が他の幹部たちと慌てて飛び

出てきた。

「仲持の道を歩いてきたのだよ。小吉の案内でな」

貞剛は、にこやかに小吉の方を振り向いた。小吉は、貞剛の背後に隠れるように立っている。

「びっくりしました。お迎えに伺いましたら、お光にそのことを聞
きまして、私は、鉄道を利用して山へ先回りした次第です。お腹が
お空きになったでしょう」

久保は盛んに恐縮している。

「大丈夫ですよ。お光さんが作ってくれたおにぎりを途中で食しま
したから」

「そうですか。では今から如何なされますか」

「小吉を目出度町に連れて行って、饅頭を買ってやろうと思う」

小吉は、貞剛の背後から顔を出し、にっこりと笑った。

「こら、小吉、支配人様に何を無理言っているんだ」

幹部が怒った。

「これこれ、私がお礼をしたいんだ」貞剛は、幹部を制して「じゃあ、小吉、行こうか」と小吉を促した。

久保も幹部も、貞剛の様子をあつけにとられたように見ていた。

貞剛は坂道を下り、目出度町の中に入っていく。

通りには人々が大勢、歩いている。ここが千メートル級の高山の

上とは思えない。

荷物を積んだ牛車が行き交う。買い物に来たのだろうか、着飾った女性もいる。

えびす屋の店先からは、湯気が上がっている。饅頭をふかしているのだ。客たちが、一個二個と買っていく。中を覗くと、簡単な食事ができるようになっており、大勢の人が食事を楽しんでいる。

「饅頭、幾ついるんだね」

「えっ、僕だけの分じゃないの」

小吉の表情が明るくなる。

「お父さんやお母さんの分も買ってあげるよ」

貞剛は「十個包んでくれ」と店員に頼んだ。

「十個も！」小吉は弾んだ声で言い、「やった！」と拳を挙げた。

「伊予屋に行くか。お父さんへの酒を買おう」

貞剛の言葉に、小吉の表情が輝く。急ぎ足で伊予屋に向かう。

別子銅山で唯一の百貨店だ。衣料から食料品まで多くの品が揃っていて、買い物客で賑わっている。

「おじさん、お酒はここだよ」

小吉が、酒売り場に先回りをして、貞剛を呼ぶ。

酒は、量り売りのようだ。銘柄は「イゲタ正宗」。イゲタ（井桁）

は住友の家紋だ。

この酒は、別名「鬼ごろし」と呼ばれ、辛口でアルコール度数が高く、すぐに酔えるとなかなかの人気だと言う。小足谷こあしたにの醸造所で造っている。

一升瓶に酒を詰めてもらい小吉に持たせる。小吉は両手でしっかりと抱える。饅頭は弁当用の風呂敷に包み、首にかけた。

「気を付けて持って帰れよ。また頼むこともあるから、その時は頼んだよ」

「任せといて」小吉はどんと胸を叩き、「おじさん、ありがとう。またね」と坑夫長屋の方に飛ぶように走って行った。

小吉が見えなくなったのを確認すると、「さあ、行くか」と貞剛は再び勘場に戻った。

支配人執務室に入ると、早速、土木課長の本荘種之助を呼んだ。

貞剛の机の上には、久保に提案した「山林之義ニ付上申書」が置かれていた。

これは本荘が、久保に別子の山林保護について上申したものが、そのまま棚ざらしになっていた。

「本荘、入ります」

きびきびとした身のこなしで本荘が執務室に入ってきた。

「本荘君、これを説明してくれるか」

貞剛は、本荘の上申書を手に取った。

本荘の表情が、急に明るくなった。

「採り上げてくださるのですか」

「今、考えている。私は、この別子の山々の景色に、いささか衝撃を受けているところだ。あまりにも荒涼としている……」

「その通りです。お山に自然を取り戻さねば、別子はいずれ立ち行かなくなります」本荘は、身を乗り出した。「ご説明します。私の提案は、山林課が、製炭課が所管する製炭林、薪材林を所管する。その上で山林調査を行い、区画を決めてそれぞれの区画に相応しい植樹、伐採を行うのです。今までのような無計画な山林伐採は禁止し、鉱山で使う燃料は薪炭から石炭に転換します。そして必要な坑木などは他所からの調達で凌ぎます。伊庭支配人、森を取り戻しましょう。もしなければ早晩、別子銅山は行き詰まります」

顔が青ざめるほど真剣な様子で、貞剛に迫った。

「本荘さん、お互い近江の生まれですね」

本荘は、近江八幡出身だ。実は貞剛とは親戚筋にあたり、本荘の住友入社の保証人は貞剛なのである。

貞剛は、故郷の滋賀の話をした。琵琶湖周辺の山々も信楽焼などに使用される炭のために木々が乱伐され、雨が降ると、土砂が川に流れだし、洪水を引き起こしていた。

「近江の人たちは、山に植林をし、水害を食い止めたのだ。別子も

なんとかしなければ、土砂崩れなどで多くの人命が失われる可能性がある。山の神の逆鱗げきりんに触れるだろうね」

貞剛は言った。

「私にやらせてください。お願いします」

「私と一緒に第一回衆議院議員選挙で当選した、田中正造しんせいぞうという人がいる」

「足尾銅山の鉍毒問題に取り組んでおられる方ですね」

「田中先生によると、足尾銅山の鉍毒が、渡良瀬川わたらせがわなどの洪水で流域の村々を襲い、木々や農産物を枯らし、魚類を死滅させ、人々の暮らしを破壊しているという。田中先生は、自らを下野の百姓しもつけと言われている。百姓の暮らしを立ち行かなくして、何が近代国家か、ということなのだろう。私も同感だ。足尾のようになってはならん」

貞剛は強い口調で言った。

「費用は如何どうしましょう？」

本荘は心配そうな表情になった。

「金と自然とどちらが大切な。そんなことは考えなくても分かる。住友が今後も世の中に存在を許してもらえるかどうか、ここにかかっている。費用は気にせずやりなさい。私が責任を持つから」貞剛は、何かを思いついたかのように上目遣いになり、「品川しながわにも協力を乞うことにしよう」と言った。

「品川弥二郎先生ですか」

「品川は、農こそ国の根本と言い、農政に造詣が深い。山林局長として国に尽くしているから、植林を手伝ってほしいと言えば喜ぶだろう」

「願ってもない話です」

本荘の表情が明るくなった。

「植林の作業は、私も手伝わせてほしい。村の人やお山の坑夫たちにも協力してもらおうじゃないか」

「ぜひともそうしましょう。支配人にもたくさん植えてもらいますよ。ところで」急に本荘が声をひそめる。「支配人、十分に気を付けてください」

「何に気を付けるんだね」

貞剛は、にこやかに言った。

「別子には、不穏な空気が漂ってしまして……」本荘は眉を曇らす。

「前任の久保支配人の専横に反感を持つものが多いのです。これは弘瀬総理人に対する反発でもあります。私のような弘瀬総理人と縁戚関係にある者も批判の対象でありまして……。銅山幹部と、現場の坑夫たちの反目も甚だしき状態です。弘瀬総理人を追放せよという声が日に日に大きくなっております」

「弘瀬総理人は製鉄業に取り組まれたが、上手く行っていない。そ

の責任を取ろうとしないからかね」

貞剛は、穏やかに聞いた。

「確かに広瀬支配人は偉大な方です。しかしその虎の威を借る狐が多いことも問題でしょう。それに思い付きで事業を拡大させることがあり、職員も坑夫も過重な労働で疲れ切っています。久保支配人は、交代になりましたが、業績の悪化などでもっと首を切られる者が出てくるとか、人員整理が進むとか、いろいろな噂があつて、銅山の皆が動揺しています。大島前理事の影響もまだ強いのです」

大島供清（しむらぎよ）は、理事を退任した後も反広瀬の活動を続けているようだ。

「煙害の問題もある」

貞剛は、神妙な顔になる。

「それらは皆、繋がっています」

「とうとうと」

貞剛は、詳しく説明するように本荘に促した。

「惣開、山根精錬所などを新居浜近辺に造り、銅の増産を進めた結果、煙害が広がりました。銅山で働く者たちの多くは新居浜周辺の者たちです。彼らは農地や山が枯れていくのが耐えられないと思っ
ています。しかし、農地も山林も皆、住友の所有で、文句が言えない。そんな鬱憤（うつげん）が銅山に満ちているんです。煙害に対して遂（つい）に去年

の九月、新居浜の農民たちが抗議行動を起こしましたが、住友はまともに取り合いませんでした。このことに批判が集まり、銅山で働く者たちの中にも農民に同調する者が多くなっておりまます。まさかとは思いますが、伊庭支配人に危害を加える者がいないとも限りません。広瀬総理人に対する反発がそのまま伊庭支配人に及ぶ可能性があるのです」

本荘は、一気に話し終えると、「言いすぎました。申し訳ありません」と頭を下げた。

「いや、ありがとう。せいぜい気を付けることにしますが、本荘さんは、私のことなど心配せずに植林の詳細計画を練ってください」

貞剛は笑みを絶やさない。

本荘は、執務室を辞去した。

貞剛は、机の上に置かれた海南新聞に目を通す。銅山関連の記事を探す。

七月十四日付け。

「煙害事件に対する二官吏

住友精錬所煙害事件について同地村民に不穩の状況あるより、新居周布桑村郡長、津田顕孝氏は去る十二日、新居浜村へ出張し、また同地へ出張中なりし」

同日の主力記事は、日本と清国が朝鮮での東学党の乱の終息を巡

って対立しているとの内容だった。

朝鮮半島は、日本をはじめ欧米諸国に浸食しんしょくされつつあった。そこで朝鮮の独立を保ち、列強の侵略や清国の支配を許さないと主張する排外的な宗教団体東学党が大きな反乱を起こした。

これを鎮圧する名目で日本、清国は朝鮮に出兵した。

乱は鎮圧されたが、日本、清国とも撤兵しなかった。お互い譲らず、英米露の三国が調停に入ったが不調となったと記事は伝えている。

——いよいよ戦争が始まるのか。

貞剛は暗い気持ちになった。戦争ともなれば、銅の増産が要請される。増産すれば、煙害がさらに悪化するだろう。悩みは深い。

七月十七日付け。

「煙害事件の後報

すでに再三記載せし、かの新居郷新居浜なる住友精錬所の煙害事件再燃については村民不遜の状ありしより、西条警察署にては非常警戒をなせしかば、ようやく一時を弥縫びほうするを得たるも昨今に至りてまたまた不遜の風説盛んなり。よって西条警察署長坂本到氏は、川之江警察署に開きたりし、方面会所より直ちに新居浜に赴きて状況を視察し、一昨日十五日帰署せしが、同日二名の巡査を同地へ出張せしめたり」

貞剛は新聞を置いた。

明治二十一年（一八八八年）に新居浜で惣開精錬所と山根精錬所が操業を開始してから、煙害被害が一気に拡大したのは事実だ。

銅山で精錬していた時よりも銅の生産が飛躍的に増えていったからだ。

住友は、別子開坑二百年などと祝祭気分には浮かれていたが、その間、農民は米や麦の不作に悩んでいた。

農民たちが声を上げたのは、明治二十六年（一八九三年）九月のことだった。

新居浜などの農民総代が、煙害を愛媛県に訴え出た。新居浜村役場から住友に煙害調査の指示が来たが、住友は虫の害だと主張した。

——農民が見れば、虫の害か煙害かは一目で分かるだろうに……。虫の害なら、葉に点々と黒い沁みが現れる。貞剛は仲持道を歩き始める時に、老婆が見せた稲の葉を思い出した。青いはずの葉が、完全に根元から立ち枯れていたではないか。

住友が、あくまで煙害と認めないのは、それによって銅の生産に支障が出るからだ。

しかし、そのような住友の利益だけを考えた姿勢では農民は納得するはずもない。

銅は国家だと叫んでみても、農民は、米や麦こそ国家だと反論す

るだろう。その通りだから、住友は引き下がらざるを得ない。

住友の「虫の害」という回答に対する対抗措置として新居浜村などの数百人の農民が新居浜分店に押し寄せる騒ぎとなった。

その頃、海南新聞は、この騒動のことを大きく採り上げたのだらう。

この事件は、愛媛県選出の国会議員から品川弥二郎を通じて家長ともいと友純の兄、西園寺公望の耳に入った。西園寺からは友純に善処するよう指示があったのである。

友純はひどく心を痛めた。経営への関与を制限されている家長という立場では、思うに任せることができないからだ。

——あの時は、なんとも言えない安堵あんどしたお顔になられた……。別子行を報告した際の友純の表情を貞剛は思い浮かべた。

——友純様のご心痛を、なるべく早く和らげたいものだ。品川からも内々に、「早く対処しなければ足尾のようになるぞ」と警告されている。

貞剛は、書類を片付けて執務室を出る。勘場に顔を出す。早いもので陽が傾き始めている。

「どこへ行かれますか？」
慌てて幹部が近づいてくる。

「接待館そばの傍にある支配人宅に帰ります」

貞剛は答える。

久保が、接待館のすぐ傍に銅山における支配人宅を用意してくれ
たのである。新居浜の支配人宅よりかなり狭い。

久保は、どうせ仮住まいだと考えているのだろう。

「新居浜のお宅にお帰りではないのですか？」

「必要な時に、こちらと新居浜と行き来いたします。今夜は、こち
らに泊まります」

「分かりました。食事などの世話をする者をすぐにやらせますので
」
「ありがとうございます」

貞剛は、銅山街の真ん中を貫く道をゆっくりと接待館のある小足
谷の方に歩いて行く。この道が銅山の本通りとなっている。その両
側に、険しい山の斜面のわずかな平地を造成して、多くの建物が所
狭しと建てられている。

山のあちこちから焼窯の煙が上がっている。

「明日はかんきこう歓喜坑やかんとうこう歓東坑に行ってみようか」

ひとご独り言ちながら歩く。

時折、坑夫や住友社員とすれ違う。貞剛は、「お疲れ様」と挨拶
あいさつ
するのだが、相手は警戒するかのような視線で貞剛を見るだけで返
事を寄こさない。

「まあ、そのうちだな」

貞剛は、ぶつぶつ言いながら歩く。

風向きが変わり、高橋精錬所の煙が貞剛の周囲まで流れてきた。

今では惣開や山根の精錬所にその地位を奪われつつあるが、まだ現役だ。ラロックの設計で造られた本邦初の洋式精錬所だ。

本通りの右手には高橋部落があり、高橋精錬所で働く人たちの住居がある。

夕食の支度をしているのだろう。煮炊きする煙が上がっている。

夫の帰りを待ちながら、妻たちが道に出て、笑いながら話を交わしている。その脇で子どもが遊んでいる。

「新しい支配人さんかね」

でっぷりと肥えた女が声をかけてきた。

「はい、そうです。よろしくお願いします」

貞剛は立ち止まる。

「私ら、ここを追い出されたら行くところがありません。首切りなんかせんといってくださいな」

彼女と話していた女たちが一斉に貞剛を見る。

貞剛は、何も答えずにその場を通り過ぎようかと思った。しかし、彼女たちがあまりにも真剣な表情だったことに心を動かされた。

「皆さん、機嫌よく、働いてくださいな」

貞剛はにこやかに言い、軽く頭を下げ、その場を後にした。

女たちは、それ以上、何も言わなかった。

学校や劇場が見える。斜面を切り開き、石組みを組んでその上に建っている。

「小吉は坑夫の子どもだが、あの小学校で学んでいるのだろうか」
明るい小吉の顔を思い浮かべる。

住友は、銅山職員の子弟教育のために、明治六年（一八七三年）に目出度町に小学校を開校した。その後、明治二十二年（一八八九年）に小足谷に移転。教員七名ほどに生徒は男女合わせて三〇〇名近くいる。

劇場は、収容人数一〇〇〇人という大きさだ。新居浜にもない規模だ。

回り舞台があり、銅山の祭りの際には、歌舞伎役者を呼んで公演させることがある。その際は、標高一二〇〇メートル以上もある、この鉱山の街に新居浜からも観客が集まり、大いに賑わうと聞く。

接待館の近くに用意された支配人宅に着く。

小さな庭がある平屋の家だ。一人で住むには十分だ。玄関まで来ると、家の裏で人の気配がする。

「誰かいるのですか」

貞剛が問いかける。

「は、はこ」

女が小走りに駆け寄ってくる。紺こん紺がすりの着物に地味な鼠ねずみいろ色の丸帯姿だ。年齢は、四十代の後半くらいか。目鼻立ちのくつきりした整った顔立ちだ。

「あなたは？」

「失礼しました。おさきと申します。支配人様の食事の支度などをしろと言われまして参りました」

「そうですか。それはご苦労様です」

「たいしたものは作れませんが、ご用意しております。風呂も沸いておりますが、どちらを先にされますか？」

「大丈夫ですよ。私、一人でやれますから。作っていたいただいた食事を有難くいただきます」

「そうですか……。お好み分かりませんでしたので、野菜の煮たのや魚を焼いたのを用意しております。気に入らなければなんでもおっしゃってください。汁もございます。では申し訳ありませんが、失礼させていただきます」

おさきが帰ろうとする。その手に何かを握っているのが見えた。貼り紙のようだ。

「おさきさん、ちょっと」

貞剛が呼び止める。

おさきが不安な表情で立ち止まり、振り向く。

「なんででしょうか？ 支配人様」

「あなたが手に持っているものはなんですか？ 見せてください」

貞剛に言われて、おさきはしぶしぶ差し出す。やはり貼り紙だ。

広げると、「支配人、帰れ」「首切り、許さず」と墨で黒々と書かれている。

「これは？」

貞剛が聞く。

「申し訳ありません」

泣きそうな顔でおさきが謝る。

「謝ることはありません。どこにありましたか」

「家の壁に貼ってありましたので、剥はがしました」

おさきが顔を上げた。

「済みませんね。ご心配をおかけします」

貞剛は、貼り紙を丁寧にたたんだ。おさきは、なんども頭を下げながら帰っていった。まるで自分が何か悪いことでもしたかのよう
に恐縮している。

誰がこのようなことをしたのかなどは詮索せんさくしないようにしよう。
いずれにしても「虫」を退治し、職員や坑夫の人たちと、良き意思
疎通を可能にしたい。

「もし人、仏を求めば、この人、仏を失す。もし人、道を求めば、

この人、道を失す。もし人、祖を求めば、この人、祖を失す」
貞剛は、『臨濟録』の言葉を口にす。とにかく「信不及」だ。しんふきゆう
自分を信じて、多くを求めてはいけない。なすがままだ。自分に言
い聞かせる。

3

明治二十七年（一八九四年）七月十九日――。

貞剛は、銅山から新居浜分店に下りて執務をしていた。

貞剛の頭の中には、煙害をどうするかと思案が渦巻いていた。

「塩野を呼び戻すしかないだろう」
しおの

貞剛は、八年前に別子を去った塩野門之助もんのすけのことを考えていた。

塩野は、幸平に中央精錬所の建設を進言し、受け入れられずに別
子を去った。

塩野の頭にあつたのは、いずれ別子銅山といえども銅鉱石が枯渇
する時が来る。

その時のために港湾を整備して、海外などから銅鉱石を輸入し、
精錬すべきであるとの考えだった。

さらに塩野は、煙害についても心を砕いていた。

自分が設計、建設した惣開精錬所が地域の農業に被害を与えてい

ることも、中央精錬所構想に影響を与えていた。

塩野は、陸から離れた海上に中央精錬所を造れば、煙害を防ぐことができないのではないかと考えていたのである。

塩野は今、古河ふるかわの足尾銅山で技師として働いているが、明治二十三年の暴風雨による渡良瀬川はんなん氾濫によって妻子を亡くするという不幸にあっている。

何度か別子に帰りたいと希望を伝えてきてはいたが、本邦初のベッセマー式てんろ転炉を完成するまではと足尾銅山に引き留められている。

ベッセマー式転炉とは、ひょうたん型の転炉に溶融した銑鉄せんてつを入れ、空気を注入することで、銑鉄に含まれるケイ素を酸化させ、その熱で精錬するという精錬法だ。大量の木炭や石炭を必要としない画期的な精錬法として注目されていた。

足尾銅山のベッセマー式転炉は明治二十六年（一八九三年）に完成していた。

貞剛は、塩野しよんべい招聘の手紙をしたため始めた。

ふと外が騒がしいことに気付く。筆を置く。まだ午前八時を過ぎたところだ。

「支配人、大変です」

部下が執務室に飛び込んできた。

「どうされましたか」

部下の顔が青ざめているのに貞剛は驚いた。

「農家の人が、取り巻いています」

三年ほど前から、農民の煙害に対する抗議運動は激しさを増している。警察が出動する事態にも発展している。

直近では、七月三日に多くの農民が押し寄せたが、貞剛が赴任してから初めてのことだ。

「どれくらいの人数ですか」

「千二、三百名以上はいると思います。こんな大人数は初めてです」

部下は声を震わせている。

「警備の方はどうなっていますか？」

貞剛は聞く。このような事態は当然、予想していた。驚くにはあたらぬ。住友が「虫の害」と言い、煙害を否定し続けているのだから。

それに特に今年は、米麦の収穫が最悪になりそうだと聞いている。それぞれ例年の半分くらいしか見込めない。これでは農民が怒るのももつともだ。

「西条署の署長以下、警官三〇名ほどと私どもで雇い入れました者たちが、この分店の周りを守っていますが、抑えられるかどうか心配であります」

貞剛は部下の報告を聞くと、机から離れ、玄関に向かう。

「支配人、どこへ行かれるのですか」

「様子を見てこようと思います」

「おやめください」部下が必死の形相で引き留める。「あれが聞こえないのですか」

集まった農民たちが、「伊庭を出せ」「支配人を出せ」と大声で叫んでいる。

「聞こえています」

貞剛は表情を変えない。

「今、支配人が出て行かれると、どんなことが起きるか分かりません」

以前、不用意に久保が農民たちの前に出て、暴行を受ける寸前にか。
辛くも逃げ出したことがあった。

もし貞剛が農民たちの前に顔を出すと、一層彼らを刺激し、最悪の事態になりかねない。それを部下は心配している。

「ガチャン」

窓ガラスが割れる音がした。執務室の床にこぶし大の石が転がり、貞剛の足元に届いた。

「かなりの荒れようですね」

貞剛は、その石を拾い上げ、机の上に置いた。

「出ていこー!!」

「卑怯者!!」
ひきょう者の

農民たちが騒いでいる。

貞剛は、玄関に向かって歩く。部下が、「お待ちください」と叫んでいる。しかしその声に従うわけにはいかない。静かに歩いていく。

信不及。自分を信じきることだけだ。貞剛には全く気負いはない。

もしここで自分が死ぬことで、農民の気が晴れ、騒動が収まり、煙害対策についての話し合いが進むのであれば、それで構わない。

「ガチャン」「ガチャン」

窓ガラスが、投石で次々と割られる。貞剛の歩く廊下に破片が飛び散る。踏みしめると、バリツと乾いた音がする。

「支配人！ 支配人！」

部下が貞剛を呼び止める声が遠くなる。

新居浜分店の職員たちの視線が貞剛に集まる。だれもが声をひそめている。今にも農民たちが店内に押し寄せるかもしれないと、怯えているのだ。今回は、今までにない大人数の農民たちが、徒党を組んでいる。新しい支配人として貞剛が来たことで、一気に決着をつけようというのだろうか。それとも何事も最初が肝心とばかりに、脅しをかけているのだろうか。

「投石を止める！」

警官だろう。悲痛な叫び声だ。

「ウォーッ」動物の雄たけびのような声。ガシッ、ガシッという何か固い物がぶつかり合う音。農民たちが持っているむしろばた筵旗やくわ鍬などと警官の警棒とがぶつかり合っているのだろう。

「なにしやがる」

「てめえらは引っ込んで。悪いのは住友だろうが」

「警官は、住友を守るために雇われているのか」

農民たちの怒りの声が、どんどん大きくなってくる。

玄関に着いた。

外の騒ぎが間近に感じられる。しかし、貞剛は完全な静寂の中にいるような感覚である。骨は拾ってやる。がざんおしやう峯山和尚のささやく囁く声が耳元で聞こえるだけだ。

戸を開けた。

はせい罵声や悲鳴が一瞬、消えた。時間が止まったかのように誰もがその場で固まった。

貞剛の目の前に、数えきれないほどの農民たちが群がっていた。

新居浜分店の中に押し入ろうと、警官や住友が雇った屈強な男たちと揉み合い、中には、額から血を流している者もいる。

筵旗が揺れ、鍬や鎌の鋼がはがね陽の光を反射してまぶしい。

警官が農民を抑え込んでいる。振り上げた警棒を宙で止めたまま

玄関に立つ貞剛を見つめている。抑え込まれた農民と貞剛の視線がぶつかった。

「支配人だぞ。伊庭が現れたぞ」

農民が叫んだ。

その声が波のように伝わっていく。止まっていた時間が動き出し、農民たちの雄たけびが繰り返され、徐々に大きくなっていく。

貞剛は、静かに玄関先の石段をゆっくりと下りていく。そして農民たちの前に立った。

慌てて数人の警官が貞剛の周りを取り囲んだ。

「支配人、煙害を何とかしろ。このままでは米も麦もできんのだ」
農民の叫びに呼応して、無数の箆旗が揺れる。

「精錬所を止めろ！」

「毒をまき散らすな！」

農民たちが振り回す鍬や鎌が宙でぶつかり合い、金属音や鈍い音が周囲に響き渡る。

「支配人、ここに出て来てもらっては危険です。建物内に避難してください」

立派な髭を蓄えた警官が貞剛に忠告する。西条署の署長だ。

「大丈夫です。皆さんに顔を出さないのも失礼でしょう」

貞剛は署長の制止を柔らかく手で払うと、一歩、前に出た。

「支配人の伊庭です」

貞剛の腹の底から発せられた声は、農民たちの隅々にまで届く。

「ウォーッ」

農民たちが大声で叫んだ。

まさか支配人の伊庭が、この騒ぎの渦中に顔を出すとは思っていなかったのだ。

「皆さんの代表は誰ですか？」

貞剛は叫ぶ。

「俺たちが皆、代表だ」

農民が答える。

「それでは話し合いになりません。多数を恃むたのような無理強いには応じられません」

「応じられないとはどういうことだ」

農民たちの騒ぎの声が大きくなる。

「代表を決めてください。その上で話し合いますよう」

貞剛が叫ぶ。しかし、その声は興奮した農民たちに届かない。

「面倒だ！ やってしまえ」

怒号が響く。

投石が始まった。貞剛の前にも石が飛んで来る。体に当たりそうになるのを辛うじて避ける。

鎌やこん棒、鍬を振り上げた農民たちが貞剛に向かって押し寄せ
てくる。

警官が立ちふさがる。

興奮してサーベルを握りしめている若い警官がいる。貞剛は、素
早く見とがめて、サーベルにかけた手を掴む。流血だけはなんとし
ても防ぎたい。

しかし、自分の声が農民に全く届かないのは悲しくもある。何も
求めないとは思ったものの、悲しみだけは胸を塞ぐほど強烈だ。

血走った目の農民たちがすぐ傍に迫った。

「ウツ」と唸る。額に鋭い痛みが走った。投石が額をかすったのだ。
とっさに避けたために頭への直撃は幸いにも免れた。手で額を押さ
える。血がついている。しかしたいした量の血ではない。傷は浅い。

突然、農民たちと貞剛との間に女が飛び込んで来た。

「みんな、止めてください。支配人様が話し合おうっておっしゃっ
ているんですよ」

女が喉から血を吐くほどの大きな声で叫ぶ。

「お光さん。お光さんじゃないか」

貞剛は驚いた。

新居浜の支配人宅で世話をしてくれているお光だ。

「みんな、支配人様はまだ来られたばかりだよ。話し合おうってお

っしやってるんだから。話し合いましょようよ」

お光は、貞剛の呼びかけが聞こえないのか、農民たちに向かって叫び続けている。

「住友は信用ならねえ」

「俺たちは金が欲しいんじゃねえ。米や麦を作りたいんだ」

農民たちの悲痛な叫びが続く。貞剛は、申し訳ないと思う。なにか自分の言葉で、呼び掛けたいが、言葉が浮かばない。何を言えば、農民たちの心を鎮めることができるのだろうか。自分の無力さが情けなく、苦しみさえ覚える。

お光が、貞剛をかばうように立ちはだかる。両手を広げ、貞剛を守る。

「お光さん、危ない。どきなさい」

貞剛が、手を伸ばし、お光を退けた。しりぞその時、「あつ」とお光が悲鳴を上げ、その場に崩れた。

貞剛は、すぐに駆け寄り、お光を抱きかかえる。額から血が吹き出ている。投石が当たったのだ。

「医者だ、医者を呼べ」

貞剛は、新居浜分店の中に向かって声を張りあげた。中から数人の社員が飛び出してきた。

「君たち、この娘をすぐに医務室に運べ。医者を呼ぶんだ」

貞剛は、お光を抱え、額から流れ出る血を手で押さえている。指の間から血がしたり落ちている。

「はい。分かりました」

一人の社員がお光を背負い、数人が周囲を守り、走って分店の中に駆けこんでいく。

「支配人も建物の中に避難してください。もうすぐ今治署いまばりから応援が来ます。私たちでなんとかしますから」

署長が険しい顔で言う。

「しかし……」

貞剛は、眉間みけんに深く皺を寄せた。警官が貞剛の周りに集まり、壁を作るようにして分店の建物の中へと誘導していく。

貞剛は、初めて挫折ざせつという言葉を自分のうちに見出していた。

京都御所の警備に当たった時も司法官として勤務に就いていた時も、いろいろ失敗があった。そして住友に入ってからも全てが順調というわけではない。しかしそれらはなんとか自分の力で克服してきた。しかし、今回、多くの怒れる農民たちを前にして、これほど自分が無力であるとは想像もしていなかった。

信不及と言い聞かせて農民たちの前に立ったが、それは単に傲慢ごうまんであっただけだ。自分の力で、自分の言葉で、彼らの怒りを幾分かでも和らげることができると思う、思い上がりでしかなかったのだ。

その結果、お光にケガをさせてしまった。大きなケガでなければいいのだが……。

——私は、死を賭して、この別子に來たと思っていたが、それこそ思い上がりに過ぎない。

額の傷に手を当てた。血は止まっている。

——住友の支配人という衣を着て、それで農民たちの怒りを抑えられると思っていたのが甘い。たとえ煙害があろうとも住友の支配人として銅を捨てるわけにはいかない。それに関して農民たちの理解を得たい。銅も欲しい。農民たちの理解も欲しい。二つのものを同時に欲しがった。なんとという愚か者だ。

「ははは」

貞剛は、力なく笑った。警官が怪訝けげんそうな顔をして、貞剛を見ている。貞剛は、あまりの情けなさに涙が出そうになった。

「住友を守る気持ちが微塵みじんでもあれば、得るものは何もないだろう。否、何かを得ようと思うから失うのだ。あるがままで」

貞剛は、ぶつぶつ呟きながら自分の中の挫折感と闘っていた。

「全員、逮捕しろ！」

署長の声が背後で聞こえた。

「ウォーッ」という、人の声というより、まるで山津波のような怒声があがり上がった。

貞剛が振り返ると、今治署からも応援が駆け付けたのだろうか、大勢の警官が一斉に農民たちに襲いかかっていた。振り上げた警棒やサーベルを農民たちに振り下ろしている。さすがの農民たちも悲鳴を上げて、逃げまどっている。顔も衣服も血だらけで逃げる。それを警官が追いかける。倒れた警官に農民たちが襲い掛かる。警官の額から血が吹き出した。血に興奮して、さらに多くの農民たちが警官に襲い掛かる。貞剛の鼻にも血の匂いが漂ってくる。

貞剛は、警官に守られながら分店の中に入った。

「お光さんは……」

貞剛を守って傷ついたお光を医務室に見舞いに行く。

ベッドの上でお光が眠っている。頭に白い包帯を巻いている。その傍に医者がいる。

「ケガの具合はどうですか」

貞剛は医者聞く。

「大丈夫です。血は多く出ましたが、傷は塞ふさがるでしょう」

医者は優しく答える。

「それは良かった」

貞剛の声が聞こえたのか、お光が目を開けた。

「支配人様……」

お光が弱々しい笑みを浮かべた。

「すまなかったな。ケガなんかさせて。私をかばったばかりに」

貞剛は、お光の手を取り、頭を下げた。

「支配人様、お願いがあります」

「なんだね」

「あの人たちは、悪い人じゃありません。許してあげてください。

みんな米や麦を作りたいだけなんです」

お光の声に力がこもる。

「分かっている。分かっている」

貞剛は、何度も頷いた。

「良かった……」お光は安堵したように、うつすらと笑みを浮かべた。「いずれ支配人様のことを分かってくれますから」

「ははは、そうだといいね」

貞剛も笑みを浮かべた。

「小吉に頂いたえびす屋のお饅頭、とても美味しかったです。小吉が私にもくれたのですよ」

お光が言った。

「そうだったのか。それは良かった。こんどお光さんにも買ってきてあげよう。さあ、ゆっくり休みなさい」

貞剛は、お光の手を布団の中に納めた。

「みんないい人ですから。みんな別子が大好きなんですから」

お光は目を閉じ、うわ言のように呟いた。お光は、農民たちの暴挙をまるで我がことのように貞剛に謝っている。

——この子らが誇れるようなお山にしないといけない。

貞剛は、お光の寝顔をじっと見つめていた。

〈つづく〉